

平成28年度 新潟市潟環境研究所 第7回定例会議（概要）

日時：平成29年3月23日（木）

場所：市役所本館 - 対策室1

■会議概要

1 報告及び情報提供

- ・「潟環境研究所ニュースレター第6号」について（事務局）
- ・平成29年度潟に関する主な事業・取り組みについて（事務局）
- ・「潟環境研究所活動報告書―潟と人との未来へのメッセージ―」完成について（事務局）

2 講義

- ・3年間の調査・研究活動の総括（志賀 隆 客員研究員）

【新潟市域湖沼の水生植物相とその復元の可能性】

○水生植物（水草）について

・日本には40科249種（種のみ）の水生植物が生育している。日本の維管束植物の約4%が水草。世界では約1～2%。このことから、日本には豊富な水草が生育しているといえる。

・水草の約26%（78種）が絶滅危惧種。水草は生活水域に生息し、水質の悪化に敏感である。そのため改修工事を取り除かれ、排水が流れ込むと消失してしまう。農作業方法の変化も生息に大きく影響を及ぼしている。

○平成26年度「掘削地の植物調査と土壌撒きだし試験による福島潟の埋土種子集団の解明」

・水生・湿性植物の植生帯の埋土種子を用いた植生復元の可能性を探るために、福島潟に造成された掘削池の植物相の調査を行った。それとともに福島潟の土壌を採集し、そのなかにもどのようなものがあるのかを調べるために撒きだし試験を行った。

・掘削池では148種の維管束植物の生育が確認された。また、撒きだし試験の結果では、約30種1,400個体の発芽が見られた。

・掘削したところは潟本体から比べてすごく範囲は狭いが、潟内と同等の水草の多様性があり、潟内では失われたような水生植物がそこで再生していることが分かった。

・1年目の結論は、失われた水草たちを水辺に呼び戻すことは、撒きだし方の工夫などで十分できるのではないかということだった。ただし、復元された植生は、放っておくとヨシまみれになり、陸地化が進む。昔はいろいろな草が乱があったが、そういうメカニズムがないと復元した植生を維持するのは難しいため、維持に関しては別に考えていく必要があるのではないか。

○平成27年度「鎧潟干拓地の水生植物相と埋土種子集団の構成」

・鎧潟干拓地を調査地として、植物相調査と埋土種子構成種を把握するための土壌採集をおこなった。

- ・ 鎧漕干拓地で確認できた水生植物は水田で 9 種、水路で 23 種。干拓前の 1946 年～1967 年に確認された水生植物は 72 種で、今回の調査で確認されたのは 16 種であり、大幅に減少。
- ・ 浮葉植物のヒツジクサ、ヒシのグループが極端に減っている。このことから止水環境が鎧漕周辺からはなくなってしまったということがわかる。
- ・ 鎧漕の植生を回復させたいと思えば、表層の 20 センチとかではなくてより深いところの土をうまく撒きだすと、鎧漕に昔いたものが出てくるかもしれない。ただ、数はとても少ないので詳細に調査する必要もあるし、もともと自生していた水生植物の生存種子は限られているから、大規模に撒き出すとかそういうことを考えないといけないのかなという状態。

○平成 28 年度「新潟市域の小規模湖沼における水生・湿性植物相と水生植物の簡易採集法の評価」

- ・ 新潟市域の小規模湖沼の植物調査は、大規模湖沼に比べ不十分。
- ・ 新潟市内の 11 の小規模湖沼の水生・湿性植物相を調査した。結果は、水生植物は 47 種、湿性植物は 75 種確認された。
- ・ 水生植物と湿性植物の種数は 13～42 種と小規模湖沼は数が少ない。絶滅が危惧される種類は 13 種くらい。
- ・ 見方を変えて、小規模湖沼をまとめてその他の大規模湖沼と比較してみると、小規模湖沼にしかない植物も 16 種いる。鳥屋野漕と佐漕よりも多いことになる。
- ・ 小規模湖沼も新潟市域の水辺の植物の生育する環境として非常に重要であり、小規模湖沼は水生植物の多様性の維持に貢献している。
- ・ 新潟には外来種が意外に少ないのが特徴だが、スイレンとコカナダモが一部で増えている水域があり、早めに対応したほうがよい。

○まとめ

- ・ 新潟市域の「水辺のにぎわい」はかなり失われている。
- ・ 埋土種子を用いて植生を復元できる可能性がある。
- ・ 小規模湖沼も大規模湖沼に劣らず重要である。
- ・ 水路が「漕にいた生きもの」の逃避地になっているかもしれない。